

ドレッドノート時代における

ジュリアン・コルベットの業績

ピーター・スタンフォード

(訳者: 平野 龍二)

Peter Marsh Stanford, "The Work of Sir Julian Corbett in the Dreadnought Era," *U. S. Naval Institute Proceedings*, Vol. 77, No. 1, January 1951.

翻訳の趣旨 (訳者)

この論文は、コルベット没後約 30 年にして、管見の限りでは初めて本格的にコルベット思想を考察したものである。この論文の存在自体は知られているものの、その内容については、英米においてもほとんど紹介されていない。しかしながら、英米において頻繁に引用されているコルベット研究の古典、シュルマン(Donald M. Schurman)の『海軍の教育——英国海軍戦略思想の発展 1867-1914』「第 7 章 文官歴史家、ジュリアン・コルベット卿」¹は、この論文を参考にしている。また、朝鮮戦争最中の 1951 年に著された論文であり、この当時の米海軍がコルベット思想について、どのような関心をもったのかを窺い知ることができる論文であると思われる。

なお、原論文に節及び註は設けられていないが、読者の便に供するため、訳文各節の区切りとその題並びに訳註を、訳者が適宜付した。また、〈 〉内は、訳者が補足した語である。

1 コルベットが活躍した時代

歴史と戦略思想の分野におけるジュリアン・コルベット卿の研究は、この時

¹ Donald M. Schurman, *The Education of a Navy: The Development of British Naval Strategic Thought, 1867-1914*, London: Cassell, 1965, Chapter 7, Civilian Historian, Sir Julian Corbett, pp. 147-184.

代の偉大な先達であるマハン(Alfred T. Mahan)の研究と同様に、第一次世界大戦勃発へと繋がる時代の重圧と論争の中で達成された。それはまさに、100年前のトラファルガー大海戦以降で初めて、英国のシーパワーが重大な挑戦を受けた最後の困難な10年間であった。この時代、英国のシーパワーは欧州全般の平和の頼み綱であったが、1914年の夏以降、この平和は決して十分に回復されることはなかった。「英国による平和(*Pax Britannica*)」の最後の10年間の進展にとって重要なことは、シーパワーについて再び覚醒し、それによって軍備を拡張させることであった。そして、英国の発展と一層の繁栄をもたらす平和は、このシーパワーに大きく依存していたのであった。

国家政策の現実的で効果的な手段としての戦争の研究は、この時代の英国国民から非常に不信の目で見られていた。後にチャーチル(Winston Churchill)が述べたように、「子供たちは、ナポレオン戦争を英国国民の努力の絶頂として教えられた。そして、彼らはワールテローとトラファルガーを陸上と海上における英国軍の究極の成果と見なしたのであった」。グラッドストーン(William E. Gladstone)首相は、1890年代の「肥大化した軍備」に厳しく反対して辞職した。また、19世紀後半の英国において支配的な政治思想となった自由主義と人道主義的視点が、国民に対して、歴史を平和的に見ることを強制する方向に作用した。その時代の最も大切な価値を破壊するという戦争の概念と、その悲劇的な性質は、グリーン(John R. Green)のような新たな学派の歴史家達によって主張された、世界は必然的に発展していくという当時の理論に適合しなかったのであった。

「それゆえに、」著名な英国の軍事史家が評するように、

〈新たな歴史学派による〉その企ては、人類の歴史における〈戦争の〉重要性を貶めるために行われ、また人間の進歩の中で、通常は単に厄介な妨害要素であり、そして、何も解決しないと説明された。

彼が結論としたことは、「平和主義者と人道主義者の偏見が、その時代の本当の記録を偽るということである。それは、単に歴史の否定である」。

コルベットが、後に彼自身が「海軍史の復興」と呼んだ活動の中で仕事を行ったのは、まさにこのような時代背景に対してであった。それは、歴史の調査と分析が洗練されていく中で、戦略的、政治的、行政上の諸問題について研究と議論を再興し、具体化する大きな運動であった。マハンの偉大な歴史論文は、

戦略の分野における適切な歴史研究の手法を明らかにしたが、しかし、彼の歴史的命題を展開し、この時代の諸問題のために補正する中で、多くのことがやり残されていた。これを完成しようとした英国の歴史家達の中で、コルベットの、まさにその指導者となったのである。人道主義に深い関心を持ち、戦時における任務中でさえ自由主義の政治に積極的であったコルベットは、戦争勃発によって海軍史における最も重要な英国の権威と認識されるようになり、これまでの長い歴史を通じて最大の試練に立ち向かうべく海軍を改革し、〈戦争に向けて〉準備しようとしていた海軍軍令部へ大きな影響力を及ぼした。現代の海軍史家であるタンストール(Brian Tunstall)は、次のように記した。

ジョン・ロートン (John Laughton) 卿、M. オッペンハイム(M. Oppenheim)、ジョン・レイランド(John Leyland)、ウィリアム・クロウズ (William L. Clowes) 卿のような人々の業績がなければ、海軍史は沈滞していたであろう。ジュリアン・コルベット卿について言えば、彼の著作と教育は、海軍の戦略と戦術に全く新たな見解を付加しただけでなく、海軍政策に非常に重要な影響を及ぼしたと言っても過言ではない。

マハンの『海上権力史論』やコロン(Philip H. Colomb)の『海軍の戦闘』²が世に出た後、これらの著述家はすべて、1893年に創設された海軍記録協会(Navy Record Society)の仕事に関与していた。一方で、これらの著作は、1889年の海軍国防法(Naval Defence Act)に対する議論により惹起されていた海軍の問題への関心を大きく復活させることによって、海軍に利するところとなった。この海軍国防法は、クリミア戦争以降、低落して弱体化し、陳腐化してしまった英国海軍を復活させることを計画していたのである。この計画は、統一された艦型から成る巨大戦艦群の最初の大計画であって、近代における海軍諸問題における関心は、この時代から発展していったのかもしれない。マハンとコロンの二人は、従来よりも高度で分析的な側面から海軍史を取り扱い、それまでは全く無視されていたか、よくても半分程度しか理解されていなかった海軍戦略の問題への広範な関心を喚起した。コルベットが、『海上権力史論』について記したように、「海軍史が哲学的基礎の上に置かれた最初の時代」であった。

² 訳注：Philip H. Colomb, *Naval Warfare: Its Ruling Principles and Practice Historically Treated*, London: W. H. Allen and Co., 1891.

2 コルベット以前の英国海軍史研究

英国海軍の歴史は、クロウズの『歴史』の第一巻が公刊される前でさえも（後の1897年に刊行された巻ではマハンも寄稿している）、適切かつ極めて包括的に著述されていた。しかし、海軍記録協会によって進められた科学的な歴史手法に照らして見ると、多くの細部修正が必要であることが明らかとなった。そして、英国のシーパワーの成長に関する実際の研究は、謂わば、木を見て森を見ない状態となった。

1400年代初頭におけるアダム・デ・モレインス(Adam de Moleyns)の『複合的な英国史(Libelle of English Polycye)』（1598年にハクルト(Richard Hakluyt)によって復刻)以来、この分野の著作が、世界政治における英国の地位を基礎に、その戦略的実態を現実的に把握して示すことは希なように見える。コリバー(Colliber)、ハーベイ(Hervey)、キャンベル(Campbell)、チャーノック(Charnock)、ソウゼイ(Southey)はすべて、彼らの初期の著作で、多かれ少なかれ伝記的な研究方法を用いていた。ソウゼイは、それを「簡潔に英国海軍史を書くための最も便利な形態」と呼んだ。1790年代に早くも、チャーノックは海洋力に占める英国の位置と国益の独特な性格を十分に理解していたが、しかし、彼の著作である『海軍史(Biographia Navalis)』（1794年）の「序文」は、この主題に関して抑制的に記述されていた。それより10年早く、ハーベイは、勝利の戦闘を詳述するよりも、彼の『海軍史』（1780年）を著すことの方が重要であることを認識していたが、しかし、より大きな枠組みの中でそれを十分に纏める結論をほとんど書かなかった。その一方で、これらの19世紀における海軍に関する著述家たちは、それ自体純粋な海軍史として描かれていたクロウズの著作の広がりには到達しなかった。次の序文の記述の中で、ナポレオン戦争以前の18世紀について書いたキャンベルのような非常に素晴らしい研究者でさえ、非常に近代的で視野の広い才能を示す一方、主に伝記的研究法を用いたのであった。

我々が世界で創り出す多くのもの、そして我々の力と影響力の広がり的大部分は海軍力に負っており、我々は、繁栄していく植民地や広がりゆく英国の名声に関しても、海軍力の恩恵を受けている。そのより大きな結果として、世界の至る所で英国は自由にふるまうことができるのである。

「英国による平和」の黎明期について書いたマハンは、その「英国による平和」の基礎となるシーパワーが、どのように大きな広がりや影響力を持つようになったのかを示した。また、ロートンのような人々や海軍記録協会への初期の寄稿者達は、その発展過程における事実を正確に記すという基盤を確立したのであった。後に、コルベットは、ロートンを筆頭とするこの集団の目的について、次のように述べている。(ロートンについては、マハンも彼から恩恵を受けたと認めている。)

実際に我々は、海軍史が一般的な歴史の一部としての地位を得ることを望んでいる。何よりも、我々は関連するすべての権威についての健全で批判的な研究を基礎とした海軍史を持ちたいのである。海軍史の復興によって意味するものは、まさにこの方向の動きなのである。

そして、この動き、すなわち海軍史と海軍戦略の原則の根本的な修正と再方向づけという大きな活動の中で、コルベットは、この分野におけるロートンの先駆的業績とマハンの哲学的な原則を受け継ぐ指導者であると認められるようになった。戦争〈第一次世界大戦〉が勃発した時、コルベットは、公式の海軍史を書くように委嘱され、それは、大戦後に『海軍作戦』³として刊行された。コルベットは、おそらく今日では〈1951年当時〉、主にこの大きな苦勞が伴った大著の著者として知られている。

しかしながら、コルベットが最初に彼の名を高めることとなった独自の研究は、第一次世界大戦前、特に英国のシーパワーが来るべき闘争のために軍備拡張中であつた戦争間近の10年間に主に行われた。この業績の中で、海軍史研究へコルベットは真に貢献したのであつた。この分野における彼の最も深遠で独特な思想は、『地中海における英国』⁴、『七年戦争における英国』⁵、そして古典的名著である『海洋戦略の諸原則』⁶などの著作で示された。海軍思想と史

³ 訳注：Julian S. Corbett, *Naval Operations*, 3vols., London: Longmans, Green and Co., 1920-22.

⁴ 訳注：Julian S. Corbett, *England in the Mediterranean: A Study of the Rise and Influence of British Power within the Straits 1603-1713*, 2vols., London: Longmans, Green and Co., 1904.

⁵ 訳注：Julian S. Corbett, *England in the Seven years' war: A Study in Combined Strategy*, 2vols., London: Longmans, Green and Co., 1907.

⁶ 訳注：Julian S. Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, London: Longmans, Green and Co., 1911.

料編纂の多くが、これらの著作と海軍記録協会が編集した出版物に負っている一方で、これらの著作が書かれた状況や、どのように刊行されたかについては、ほとんど知られていない。この小論では、主にコルベットの業績のこれらの側面について言及する。

3 初期の著作の刊行

ゆっくりと、そして実は乗り気ではなく、コルベットは偉大な著作の執筆に繋がる活動に引き入れられていった。いくぶん熱心さが足りない弁護士として人生を始めたコルベットは、45歳で彼の主な努力を海軍史の分野に傾注することを決意するまでは、考古学を学び、若干の恋愛小説を執筆する芸術家のような存在であった。

1854年に裕福な両親の下に生まれたコルベットは、1882年までに法律を生涯の仕事とすることを断念し、芸術、考古学やエジプト、インド、カナダ、そして米国など世界各地への旅行などに熱中した。後年の献身的な軍における仕事とは非常に対照的であった、このような楽しい時間の中で、コルベットは、主に歴史小説を書き始め、1886年、処女作として『アスガルドの没落』というノルウェー神話に関する彼の研究を織り込んだ小説を発表した。その翌年に刊行した『神と金のために』は、エリザベス朝の精神についての研究を中心としており、英国を世界列強への途上に就かせる冒険という禁欲的な献身と向こう見ずな愛の奇妙な融合が描かれていた。この著作は、エリザベス朝時代への深い知識と、当時の文学にとっては全く新奇な海洋生活の詳細について、正確な観察を示している。この著作によって、コルベットの研究が、架空あるいは考古学的思考を乗り越えて、彼の問題意識をより純粋な歴史的関心へと導いていったことは明らかであった。そして、1889年、英国人の活動家シリーズに、モンク(George Monk, 1st Duke of Albemarle)の生涯を寄稿し、この分野で初めて虚構ではない著作を刊行した。続いて翌年には、ドレーク(Francis Drake)の生涯に関する著作を刊行した。この2つの小さな伝記研究は、歴史への関心を復活させ、その時代への知識を深めることによりかなり役に立った。双方とも、この分野に新たな風を吹き込むものであり、科学的研究の高い水準を示すものであった。『フランシス・ドレイク卿』(1890年)⁷は特に傑出して読みやすく、

⁷ 訳注：Julian S. Corbett, *Sir Francis Drake*, London: Macmillan and Co., 1890.

巧みに構成された研究であり、ドレークの生涯について簡潔に書かれた今日でも入手可能な著作の中で最良のものである。

この後、コルベットはもう一冊小説を著し、そして1898年、44歳の時に海軍史の分野で彼が最初に十分な能力を発揮した研究である『ドレークとチューダー朝の海軍——海洋国家としての英国興隆の歴史と共に』⁸を刊行した。この著作では、伝記的要素は巧みに前面に保たれる一方で、時系列に重要な政治家や軍人像が描写されていた。同様に、この分野のさらなる業績に関する基礎として役立つエリザベス朝時代の船や兵器の詳細な考古学的研究でもあった。しかしながら、おそらくこの著作が歴史学へ為した最大の貢献は、従来は責任ある歴史家でさえロマンチックで無法な無頼人と見なしていたドレークの真実の姿を覆い隠していた、くだらない伝説を拭き去ったことであった。同時に、この著作によりコルベットは第一級の海軍史家の一人として認められるようになった。この独創的なコルベットの著作は、組織の強固な力、そしてネルソン(Horatio Nelson)の時代まで匹敵する者が現れなかった軍務への献身的理想と個人的指導力に関する天賦の才能と共に、第一級の戦略家としてのドレークの真の姿を明らかにした。この著作を準備するための広範囲な研究のおかげで、コルベットは海軍記録協会と緊密な関係をもった。同年、コルベットは同協会から『スペイン戦争関連文書、1585—87年』⁹を編集することを依頼された。海軍記録協会から刊行されたシリーズの11番目であったこの巻は、原史料が重要な上に、コルベットの貴重な注釈が付され、洗練された手法で注意深く編集されていた。また、この巻は、この分野の古典として残されているロートン編『1588年のスペイン無敵艦隊の敗北に関する国家文書』における最初の2巻への序文の役割も果たしていた。協会は、1893年の設立以来、5年しか経過していなかったが、そのメンバーは、これら最初の寄稿を土台として、この分野でコルベットがさらに働いてくれることを望んだ。

しかしながら、この翌年の結婚によって、従妹でもあった新妻エディス・アレキサンダー(Edith Alexander)に説得されて、コルベットは次の著作に主なエネルギーを注いだ。それが『チューダー朝の海軍』の続編で、翌1900年に

⁸ 訳注：Julian S. Corbett, *Drake and the Tudor Navy: with a History of the Rise of England as a Maritime Power*, 2vols., London: Longmans, Green and Co., 1898.

⁹ 訳注：Julian S. Corbett, ed., *Papers Relating to The Navy during The Spanish War 1585-1587*, London: Navy Records Society, 1898.

刊行された『ドレークの後継者達』¹⁰である。この著作で扱った時代は、無敵艦隊時代以前よりも、一般の歴史家の間では広く誤解されていた。1588年の〈アルマダ海戦における〉輝かしい勝利の後、一般的には、敵は完全に掃討されたと見なされているが、実際には、エリザベス朝の戦争は16年後のエリザベスの薨去まで、切れ目なく続いたのであった。コルベットが指摘したように、この時代は英国側において実際には「大失敗」の一つであり、フェリペII世(Pelipe II)の新海軍建設、そして、サイラスにおけるスピノラ(Ambrosio Spinola)の卓越した指導力の下で、スペインのガレー船が英仏海峡で活動したことにより、評価の均衡はスペイン人の方に傾いていた。

「この時代が教えてくれる大きな教訓は、海洋力の限界である」とコルベットは記しているが¹¹、この著作はこの海洋力が作用する状況の直接的な研究であり、その限界の理由を解明している。ドレークの卓越した才能のみが戦争を理解することができ、その最も成功した戦役を計画し、他のどんな者よりうまくその戦役を遂行できたように見えるが、そのようなドレークの支配的な影響から解放されて、コルベットは戦争それ自体の状況をもっと巧みに考察することができたのであった。この著作が、1596年以降に戦争を指導したエセックス(Robert Devereux, Earl of Essex)、ローリー(Walter Raleigh)、ヴィア(Francis Vere)、モントジョイ(Charles B. Montjoy)や他の人々についての価値ある新たな研究や、エリザベス朝時代の船や砲の詳細な付録を含む一方で、主題の伝記的、考古学的側面は今や、ドレークについて叙述した前作を通じて鳴り響いた、より純然たる戦略分析やその含意に付随するものとなり始めた。

4 『地中海における英国』の刊行

1904年に刊行されたコルベットの次の大作『地中海における英国』で、彼は初期の著作における関心を脇に置き、英国海洋史における時代全体の直接的な戦略分析を行った。本書では、マハンの歴史分析の手法をいくぶん継承していたが、いくばくかの抑制や大きな修正があった。コルベットは、海軍史の根本にある小さな出来事を研究し、その草稿の基礎的な部分に大きな労力を注ぎ込み、新たな見地からこの著作を書いたのであった。「我々は、『シーパワー』に

¹⁰ 訳注：Julian S. Corbett, *The Successors of Drake*, London: Longmans, Green and Co., 1900.

¹¹ 訳注：Ibid., Preface vii.

ついて、口先だけで話している」と、コルベットは『ドレークの後継者達』の結論で記した。

そして、我々は、シーパワーの真の価値は、陸軍の作戦に及ぼすその影響にあることを忘却している。防御的戦争において、海軍は単独で十分であるかもしれない。しかし、それは全く成果がなく、犠牲が多く、戦争は長期化するに違いない。十分な陸軍の欠落は、防御的戦争においても批判されるということは、我々がドレークの後継者達の失敗から学ばなければならない大きな教訓である¹²。

この著作〈『地中海における英国』〉の中でコルベットは、英国がついに世界的列強への道に積極的で持続的な第一歩を踏み出し始めた世紀を考察しなければならなかった。この著作では、主に陸軍作戦と海軍戦略の関係が取り出されて描かれており、この時代の偉大な指導者が、海軍戦略を最も高次の外交目的に従属させるために計画した国家政策を、どのように立案したか効果的に示すことを企図していた。この政策の展開を示すために、コルベットは、クロムウェル(Oliver Cromwell)やウィリアムⅢ世(William III)のような指導者によって導かれた地中海における英国の力の成長の中に、その指導原理を求めた。彼らは、「欧州における英国の地位が、どんなに大きく艦隊行動の能力に依拠しているのか」を理解していたのである。コルベットが観たように、地中海は、まだ欧州の貿易と政治の中枢の地域であり、英国が最も効果的にその成長しつつある力を適用できる地点であった。

ジェームズⅠ世(James I)統治下の17世紀初頭に若々しかったシーパワーは地中海地域に到達し、欧州政治における英国の大きな役割への洞察と共に、クロムウェルによってさらに堅固に指導されて、続くチャールズⅡ世(Charles II)にも第2次及び第3次英蘭戦争を通じて支持された。しかし、コルベットが指摘するように、この地域における英国の力の現実的な重要性は、この世紀末頃になって、ようやく評価されるようになったのである。その時、欧州政治へ大きな関心をもったウィリアムⅢ世が始めた地中海政策によって、「真実は、目に見える形をとった」。

彼〈ウィリアムⅢ世〉は島王国の中で擁立されると、彼の〈陸軍〉大隊が達成でき

¹² 訳注：Corbett, *The Successors of Drake*, p. 410.

なかったことを、船舶〈艦隊〉がいかに与えることができるのかを、速やかに理解した。彼は、北部のシーパワーが古くからの水域の支配権を我がものにするまで、欧州の不安定で新しい国家体系が、決して安定化しないことを誰よりも早く理解した¹³。

コルベットの解釈するように、この見方で重要なことは、海上にある軍事力が、複雑な欧州政治の正に中心に向けられたということであった。そして、外部の力によって巧みに行使されることで、この軍事力は通常のを越えて効果を発揮することができ、大陸の秩序を回復することができた。水平線のすぐ向こうに、世界紛争の時代の諸問題が予想される中で、地中海は帝国貿易の生命線として新たに増大する重要性以上に、この深遠な戦略的重要性を保ち続けるとコルベットは主張し続けた。「我々の時代に」とコルベットは書き始める。

欧州の新たな〈国家〉体系が、非常に堅固に成長していったので、これを妨げるものは何もないかに見えた時、この新たな体系は、旧来の体系をほとんど完全に葬り去ってしまった。世界規模の諸帝国を我々は想像しがちである。しかし、それらは未だに欧州の体系に根を張っており、それが動揺する時、すべてのものが動揺することになるだろう。その安定を主として保証しているのは地中海における英国の力であり、ジブラルタル海峡においてユトレヒト条約が始めた状況を、幅広く継続的に欧州が黙認したことは、すなわちその中核的真実を承認したことなのである¹⁴。

ここにおいて、コルベットは単に過去の誤った概念を正しただけでなく、この分野で最も骨の折れる仕事に対する彼自身の評価の基礎を築いたのである。さらには広範かつ持続的な調査と英国民にこれを直接語りかける道筋をつけ、〈英国の〉国際的地位はすぐに脅かされるという戦略的現実を彼らに知らせた。「そこにおいて、いかに内部分裂が生起しようとも、英国の手をジブラルタル海峡まで導いたこの時代の戦略家たちの記憶を生々しく保つことが、我々の義務なのである」とコルベットは結論づけた。

5 ドレッドノート就役とフィッシャー提督による海軍の改革

もちろんこの時、コルベットは、世の動きと無関係にこれらすべての仕事を

¹³ 訳注：Corbett, *England in the Mediterranean*, Vol. II, p. 567.

¹⁴ 訳注：Ibid., p. 568.

行ったわけではない。1889年の海軍拡張は、1894年のスペンサー計画によって補足された。このスペンサー計画は、露仏海軍同盟による戦争の恐怖を主張して、戦艦部隊の持続した大幅な拡張を確保し、これに落胆したグラッドストーン首相は辞職した。1895年、海軍活動のこの大きな復活とマハンの処女作による衝撃の最中に、海軍同盟(Navy League)が創設され、ウィルキンソン(Wilkinson)やベレスフォード(Charles Beresford)卿のような人々による新たな海軍に対する無批判で大きな熱意もあり、この海軍連盟はその後も順調に発展していった。『地中海における英国』が刊行された1904年までに、世紀の変わり目に策定された大艦隊建設プログラムの結果として、ドイツは第一級の海軍大国となり、そのドイツの出現により、欧州の勢力図は劇的に変化した。この年の12月、英海軍省は、本国水域に戦艦部隊を集中し始めた。このことは、これまでの数百年間の政策からドイツ海軍力の勃興によって必要となった新たな配置への必然的な変換を示していた。事実上、英国は19世紀の政治から20世紀の政治へ転換したのであった。コルベットの叙述した欧州の秩序は、すでに危機に曝されており、欧州秩序が大きく依拠したシーパワーは、その防衛へと駆り出されたのであった。

この政策が始まったちょうど2年後である1906年12月に、ドレッドノートが就役した。最大の海軍軍備拡張競争が始まり、1914年8月に世界大戦が勃発した時、それは最高潮に達したのであった。

この建艦競争を始めさせた艦〈ドレッドノート〉の歴史的起源は、様々な源泉に辿ることができるが、この艦自体は、主にフィシャー(John Fisher)卿の業績によるものであった。就役中のすべての戦艦を時代遅れのものとしてしまうであろう同一口径の巨砲を搭載した戦艦の出現は、技術的には十分に下地ができていたと考えられていた。1904年に第一海軍卿に就任した改革派のフィッシャー提督は、確実に英国がそのような艦を最初に就役させることを望んでいた。1905年、この新型戦艦の一般的特徴が明らかになった時、この時期の海軍年鑑を精査すれば明らかのように、主要な海軍列強の建艦計画は大きく変更された。ただし、さらなる情報が入手可能となるまで、実際にはドイツ海軍の建艦計画は継続されたのであった。

これまで述べてきたように、この新型戦艦は、すべての在来艦を直ちに時代遅れにしたわけではなかったが、前弩級戦艦における英国の隔絶した優位によるハンデキャップを少なくして、ドイツに英国との海軍建艦競争に乗り出す機会を与えた。そして、この時から英国とドイツの対抗関係は、海軍を巡る情勢

の重要な要素となった。ドレッドノートが就役した年に引退した海軍大臣が、ハプスブルグーブルボン同盟が英国に対抗していた時代に起源をもつ有名な海軍建設に関する二国標準主義¹⁵の最後の声明を出した。1908年までに、ドイツの脅威に直面して、この政策は公式に放棄された。1912年に、新たに海軍大臣に就任したチャーチルは、戦争という事態において、新しいドイツのシーパワーを明確に打ち負かすのに十分なほどに英国海軍を強力にすることを計画した政策を公表した。

この大きな軍備拡張及び政策転換と共に、海軍全体の組織構造を通じて改革の動きが始まった。それは主に、フィッシャー卿とその支持者によって導かれ、彼らは海軍省内外で派閥を形成し、まもなく「フィッシャーメン〈フィッシャーを取り巻く人々〉」の通称で呼ばれ、権勢をふるうようになった。フィッシャーは、1902年、第二海軍卿として海軍省で勤務し、同時代の評者の言葉を借りれば、「海軍省では、従前の平穏な時代には決して行われたいような活動がその後続いた」。1904年に、第一海軍卿に任命され(古い役職名への復活であるが、これが就任後最初に彼が行ったことだった)、フィッシャーは速やかにドレッドノートの建造を促進し、彼の君臨を特徴づける抜本的な改革と組織改編運動に乗り出した。

6 英海軍大学校におけるコルベットと『七年戦争における英国』

単なる技術的な改革や組織上の改編だけではなく、この運動は海軍内部における戦略思想の新たな研究と再評価に繋がる海軍政策の抜本的な改革から始められた。そして、この時期のコルベットは、主にこの仕事に関わるようになった。前に進めなければならない仕事は莫大であり、近代戦環境下における戦争準備に向けた海軍全体の効果的な再教育を含んでいた。ある士官が、個人的経験から次のように記録している。

1901年以前、海軍には、戦術、戦略、あるいは全体としての戦争指導の研究に関する施設は何もなかった。・・・コロン、ブリッジ(Bridge)、クラーク (George Clarke) 卿のようなごくわずかな人々が、これらの主題について関心を喚起するように努めたが、海軍の教科課程にこれらのものが導入されることは、全くなかった。

¹⁵ 訳注：英国の海軍力を世界第2位と第3位の海軍力を持つ国を合わせたものよりも優位にしておく政策。

1901年、ついに海軍大学校がポーツマスに設立され(後にグリニッチに移転)、翌年、海軍史の講師としての能力が買われ、コルベットは、この海軍大学校に加わる。『地中海における英国』の刊行後、コルベットの次の主要著作は、『七年戦争における英国』であり、それは海軍大学校における彼の講義を発展させたものであった。この研究は、従来 of 所論を確証するための研究と教育という発展的な目的を示すと共に、帝国防衛の近代的状況によって必要とされた海軍戦略の伝統的思想の再評価を目的としていたのであった。

海軍大学校で講義を始めて2年後に刊行された『地中海における英国』は、明らかに、次作の『七年戦争における英国』へと繋がる発展の方向性を示唆しており、おそらく、重要な戦略思想家としてのコルベットの名声を確立したと言えるだろう。マハンは、後の1911年に『海軍戦略』として公刊されることになる米海軍大学校の講義で、繰り返しコルベットの著作に言及した。また、1905年に、コールドウェル(C. E. Caldwell)陸軍大佐は、陸軍戦略を、英国にとって常に優位を占めるに違いない不可欠の海洋戦略に統合させる初めての徹底した試みを執筆するが、コルベットを、「海洋に関する深遠な知識が偏向することを許さなかった『ブルーウォーター派』¹⁶の一人」として引用した。

『七年戦争における英国』は、偉大なチャタム(William Pitt, 1st Earl of Chatham)伯の戦争指導に関する研究の古典として今日は認められているが、ある程度は歴史叙述が損なわれても、そのテーマとして戦争指導全体の徹底的で慎重な戦略分析に主眼を置いていた。この著作において、『地中海における英国』よりも高いレベルの関心の焦点を示唆することで、コルベットは、シーパワーを基礎とした戦争研究に関する新たな領域を明確に定義したのであった。

通常 of 理解よりも高度で幅広いものとするにより、海軍戦略は海軍軍人にとつてと同様に政治家にとつて、陸軍軍人にとつてと同様に外交官にとつて不可欠の技法となる。そして、それは歴史によつてのみ習得できるのである。我々は、それを戦争における艦隊の機能と呼んでもよい¹⁷。

英国が最も成功した戦争(七年戦争)におけるチャタム伯の指導に、コルベットは、探し求めていた新たな戦略概念に関する理想的な表現を見いだした。

¹⁶ 訳注：ここでは大洋海軍主義という意味ではなく、海洋について知悉しているという意味で用いられていると思われる。

¹⁷ 訳注：Corbett, *England in the Seven years' war*, Vol. I, p. 1.

英国海洋史をその根源であるエリザベス朝時代から研究して、コルベット自身の考えは、あたかも彼がその海軍政策や外交政策を学んだ偉大な指導者たちの概念のように形成されたのである。そして、その意味するところを完全に包含するのに十分なほど大きな理論的枠組の中で、ついに大ピット(the elder Pitt)〈チャタム伯〉の見事な戦略全体の意味を述べることができたのであった。海軍戦略における従来の研究は、戦争において制海は艦隊の究極の目的であるとするものであった。「しかし」、コルベットが指摘するように、「歴史的手法は、同時に制海は目的のための手段に過ぎないということを明らかにしている」¹⁸。戦略概念が実際にはどのように戦争に適用されるのかを唯一述べることができる歴史分析からの研究により、コルベットは、次のような結論に達した。

英国が当初は欧州において、そして後には世界において、その地位を確立させた長きにわたる一連の戦争のすべてに関して、答えは単純で不変である。艦隊の機能と艦隊が常に使用される目的は、3つに分類される。第一に、〈自国の〉外交努力を支援し、〈敵国の外交努力を〉妨げること、第二に、〈自国の〉通商を保護し、〈敵国の通商を〉破壊すること、第三に、沿岸における〈自国の〉陸軍作戦を助長し、〈敵国の陸軍作戦を〉妨げることである¹⁹。

さらに、コルベットは「兵器を完全なものとするに視野を限定し、それを使用する技法を無視する」ような海軍思想の危険な傾向に警鐘を鳴らした²⁰。そして、大ピットがこれら歴史的原理についてほぼ完璧に近い解釈をしたことへの熱烈な讃辞と共に、序文における分析で次のように結論づけた。

ピットにとって、陸軍と海軍は、一つの武器の刀身と柄であった。そして、彼がその武器を手にとった瞬間から、彼は手中の手段の強さと範囲を示し始めるのであった。ピットは、敵の海軍兵力を破壊することなく、海洋を越えて最も重要な目標を攻撃できただけでなく、本国において彼は、フランスの伝統的戦略を粉砕し、フランスを絶望的な侵攻に駆り立てることにより、フランスの主力艦隊を自らの手中に送らせたのであった²¹。

¹⁸ 訳注：Ibid., p. 6.

¹⁹ 訳注：Ibid.

²⁰ 訳注：Ibid.

²¹ 訳注：Ibid., p. 8.

7 『海洋戦略の諸原則』と陸海軍の協同

第一世界大戦前に書かれた最後の、そして最も論争を呼んだ著作である『海洋戦略の諸原則』（1911年）において、コルベットは、英国の海洋史に対する自らの研究のすべてを論述した。この著作におけるコルベットの目的は、古典的な陸軍戦略と海軍戦略が、目的に対する手段と見なされる一つの戦争理論を構築することであった。実際にそれらの戦略は、英国を世界列強に押し上げる数々の戦争の中で、そのように扱われたのであった。戦略思想は、あまりにも長い間、戦争の行方を決定づける一つの最終的な戦略における別々の要素、すなわち陸軍戦略と海軍戦略は独立して注目されていたとコルベットは感じていた。「それら〈陸海軍戦略〉の密接な関係をもたらすものが戦争理論である」とコルベットは記した。

陸軍戦略と海軍戦略の双方を包括するものが、より大きな戦略であり、その中で艦隊と陸軍は一つの武器としてみなされ、双方の活動が調整され、それぞれ双方の十分な力が発揮されるために従わなければならない道筋が示されていることを、それ〈戦争理論〉は明らかにしている²²。

この『海洋戦略の諸原則』が書かれた時代において、この研究の重要性は、いくら強調しても足りなかった。1911年、英国は戦争前夜にあり、世界各地でその責任が極限まで試されていた。英国がその後間もなく突入した戦争は、1930年代の危機を経て、第二次世界大戦に至り、現在〈1951年〉の困難な争乱の時代まで続いた。英国は、さらに言えば英語圏世界全体は、それらの国々をこれまで以上に結びつけていく海洋防衛の大きな問題に堪えうるすべての戦略思想を必要とした。コルベットは、個人的に戦争は起こらないだろうと確信する一方で、彼の精力のすべてをこの新たな仕事に傾注したのであった。

8 コルベットと英海軍の改革

フィッシャーが最初に海軍省で勤務したのと同じ年に海軍大学校の講師となって、コルベットはドレッドノート就役に伴う改革の波の影響を受けざる

²² 訳注：Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. 8.

を得なかった。フィッシャーは早くも1893年には、マハンの業績と比較した時、シーパワーの意味とその使用を評価する優れた海軍思想家が欠如していると記し、いつもの痛烈なやり方で、この時代のコロンの労作を、「彼は海軍の権威ではないし、決して核心に触れたことはない」と批判した。コルベットについて言えば、彼はフィッシャーの政策を理解し、賢明に支えるため十分に幅広い見識をもって、フィッシャーに仕えたように見える。その一方で、研究については、コルベット自身の独自性を保ったのであった。ともかくコルベットは、この時期、フィッシャーと緊密に協力して働いた。そして、フィッシャーのブレンの中で中心的な人物となり、ドレッドノート政策の擁護を執筆したが、後にフィッシャー提督はこれに対して強い感謝の意を表した。海軍に関する第一次世界大戦後の著名な執筆家が記したように、「コルベットは、多かれ少なかれ、フィッシャーの作戦計画に関し、彼の思想に影響を及ぼした」。そして、コルベットに対して批判的な評者は、年老いた提督の戦略思想に取り憑く悪霊のようなものとして、彼を見なしたようであった。

批判の是非は別として、コルベットがこの時期の海軍政策の形成において重要な役割を果たしたことは確かであった。その一方で、海軍記録協会の仕事も続けており、『戦闘教範——1503-1815』(1905年)²³、『信号と教範 1776-1794』(1908年)²⁴、『スペンサー文書』(1913-14年)²⁵などの一連の書籍を刊行したが、このシリーズの完成は戦争の勃発によって中断した。コルベットはまた、1910年に『トラファルガー海戦』²⁶を刊行した。これは、1805年の偉大な勝利を創出した、海上におけるネルソンと海軍本部におけるバーハム(Charles M. Barham)海相の協力について、非常に興味深く、巧みに書かれた研究であり、この著作からコルベットは、翌年に著す『海洋戦略の諸原則』に関する新たな素材を引き出したのであった。そして、「海上における私有財産の捕獲」という章は、マハンの編集した『戦争で見過ごされた側面』(1907年)に寄稿したものであった²⁷。この全期間を通じて、コルベットは海軍大学校との関係を継続し、

²³ 訳注：Julian S. Corbett, ed., *Fighting Instructions 1530-1816*, London: Navy Records Society, 1905.

²⁴ 訳注：Julian S. Corbett, ed., *Signals and Instructions 1776-1794*, London: Navy Records Society, 1908.

²⁵ 訳注：Julian S. Corbett, ed., *Private Papers of George, Second Earl Spencer; First Lord of the admiralty 1794-1801*, 2vols., London: Navy Records Society, 1913-14.

²⁶ 訳注：Julian S. Corbett, *The Campaign of Trafalgar*, 2vols., London: Longmans, Green and Co., 1910.

²⁷ 訳注：Julian S. Corbett, "The Capture of Private Property at Sea: The Nineteenth

専門職として海軍作戦の健全な理解を確実にする一助となるために働いた。その一方で、彼自身の戦略思想も引き続き発展させていった。この時、コルベットの既成海軍史全体の復興に大きく関わっていたが、戦争の原則における教育の新たな運動の第一人者として海軍内で認識されるようになった。ある評者が第一次世界大戦後に、次のように記した。

ジュリアン・コルベットによって始められた学派は、本質的に、海軍省や艦隊、そして、歴史観に基づく海軍思想の根源と緊密に結びついた海軍学派である。その〈研究〉方法は、海軍記録協会によって準備された。この協会は、海軍の古い込み入った文献の中に道筋を創り、昔の提督たちのドクトリンを復活させるのに大いに役立った。この提督たちは、シーパワーの夜明けを見つめ、誕生した帝国の構造を研究したのであった。それは刺激的な分野ではないが、海軍教育の本質的な部分である。

実際に、この先すぐに直面する試練に関して、英国のシーパワーの構造全体に新しい活力を与える十分な時間は、ほとんどなかった。この期間を通じて、コルベットは戦略的作戦の全体的方向性という重要な問題に主な関心を寄せた。特に、軍種間の協力の問題が改革運動の思慮深いメンバーの心を占めていた。早くも1890年には、ある王室委員会がこの問題を調査し、首相によって統括された統合会議を提案した。しかし、国防内閣委員会が設立される1895年までは機能がはっきりせず、実際に効果はなかった。1903年、バルフォア(Arthur J. Balfour)首相は遅まきながら、帝国国防委員会(Committee of Imperial Defence: C.I.D.)を設立し、それは、1904年には効果的に機能し始めた。海軍大臣であったチャーチルは、この帝国国防委員会を「我々の軍備の道具」と呼んだ。コルベットは、早くからこの集団に信頼され、第一次世界大戦中は、委員会の歴史部門の責任者という立場で、公式な海軍の歴史家として働いた。カスティクス(Raoul V. P. Castex)²⁸は、「多かれ少なかれ、コルベットのために創られた官職制度(*institution et poste crees plus ou moins pour lui*)」と記して

Century and after,” in Alfred T. Mahan ed., *Some Neglected Aspects of War*, Boston: Little, Brown and Co., 1907, pp. 115-153.

²⁸ 訳注：1878～1968年。フランスの海軍軍人であり、戦略思想家。多くの著作、論文があるが、*Théories Stratégiques*, Paris: Société Géographiques, Maritimes et Coloniales, 1929-1935は、日本でも翻訳刊行されている。ラウル・カスティクス『戦略理論』馬渡重和訳、全5巻、東京水交社、海軍省教育局、1933-1937年。(第1巻は東京水交社から、第2～5巻は海軍省教育局から刊行されている。)

いる²⁹。

しかしながら、海軍軍令部全般にわたる戦略全体の実際の調整は、1911年のチャーチルの海軍大臣就任を待たなければならなかった。このチャーチルの海相就任は、陸軍大臣のホールデン (Richard B. Haldane) 卿のおかげであり、この集団を生み出したのであるが、それはアガデール危機によって、陸軍と海軍の戦争計画が、いまだに全く不統一であることが明らかになった後のことであつた。実際、この時の海軍作戦計画は、いまだにドイツの沿岸に近接してこれを封鎖するという考えに基づいていたように見える。オランダからノルウェーまで伸びる、修正された中間的な封鎖案の変更は、1914年7月、第一次世界大戦勃発の一ヶ月前まで、最終的に放棄されなかったようにみえる。コルベットは、この時、海軍軍令部の信頼の下、海軍の図上演習を体系化することを助けながら、彼の仕事は疑いもなく、近代的な海戦の状況について、より現実的な見方を海軍省にもたらず一助となつた。しかしながら、その先にある海軍全般における戦争の諸問題についての教育は、時代が示す現実からは遅れる傾向にあり、平時における思想的習慣が依然として支配的であつた。チャーチルが公正に観察したように、

英国海軍は、海軍の研究に重要な貢献をしてこなかった。シーパワーに関する定評のある著作は、米国の提督 [マハン] によって書かれたものであつた。英国の海上戦闘と海軍戦略の最良の説明は、英国の文官 [ジュリアン・コルベット卿] によって編集された。「沈黙の艦隊(Silent Service)³⁰」とは、思想や研究に熱中するために無言であるということではなく、日常の決まりきった業務や複雑化し多様化した技術によって圧迫されたためであつた。我々 (英国海軍) には、有能な行政官、すべての種類の素晴らしい専門家、匹敵する者がいない航海長、申し分のない訓練指導官、みごとな艦艇勤務の士官、献身的な勇者がいるが、闘争の手始めにおいて、戦争の指揮官よりも、艦艇の指揮官の方が多かつた。

9 第一次世界大戦とコルベット —— 『海軍作戦』の刊行

戦争が始まると、コルベットはスレイド (William Slade) 卿と共に、帝国国防委員会に新たに組織された歴史部門の責任者となつたが、受け取つたすべて

²⁹ 訳注：カスティクス『戦略理論』第1巻、70頁。

³⁰ 訳注：無言を伝統とする英国海軍のこと。

の行動報告を照合し研究することを対象とした。この行動報告は、主要な関係者によって記録され、批評され、海軍省の指示により公式に刊行された。この計画の主な目的と成果は、戦争後に公刊された『海軍作戦』であり、コルベットの著者として、広く英国内で知られるようになった。この著作自体はある意味、コルベットの歴史著作の最高の到達点を代表するものではあったが、その性質から、彼独自の研究と思想の多くを具体化できなかったのであった。おそらく、これまでに計画されたことのないほどの規模で実施されたことに由来する任務の困難さと特別な危険性により、必然的に表現は制限され、不十分な記述となった。このことは戦争後、特に戦争指導の功績を論争した関係党派の中で、強い批判を受けるに至った。

そうであるにもかかわらず、妨害され、重い負担であったこの著作の功績は、著名な批評家をして、著者〈コルベット〉は「熟練工芸の創始者」であると言わしめるのに十分であった。ついに、ジュリコー(John R. Jellicoe)は、巻き起こされた党派論争を越えて、コルベットの業績を賞賛した。ジュリコーはジェットランド海戦の評価で、次のように記している。

報告、急送文書、信号の研究によって、コルベットが私の意図を深読みした方法は、実に素晴らしい。

当時の海軍省によって匿名で刊行されたこの賞賛の初稿のおかげで、コルベットは翌年、ナイトの称号を授与された。後にある目撃者が記録したところによれば、「6時間か8時間の間であったと思うが、我々は、それ〈コルベットの叙勲〉を、それ〈コルベットの業績〉が芸術作品に値することを、そして人がこれまで成し遂げた中で最も真実で公正な記録であることを非常に喜んだ。」

コルベットは、この戦争中に数多くの小論を執筆した。それは英国の封鎖政策を弁護する二つの小論を含んでいたが、米国人の感情への当時の配慮から、公式戦史からこの小論を削除せざるを得なかった。また、コルベットは、時間を見つけて「海軍史の復興」と題した講義を行ったが、これは彼が力を注いでいた活動の諸目的と成果についての考えを説明するものであった。その中で、コルベットが非常に多くの部分を費やしたのは、戦時に国民の理解を得ることは価値があるということであり、この彼の主張は有名である。「開戦当日から」コルベットは、次のように続けて書いている。

十分な理解と完全な信念をもって、すべての広報官が海軍史の復興から学んだことを広めようと試みていた。そして、国民は無数の価値ある結果と共に、戦争指導者たちの言うことに耳を傾けた。

コルベットのこの小論の中で、巨大ですべてを破壊し尽くす戦争という出来事は、それが終結した後にならなければ、決して適切に理解されることはなく、また真実の規模を想定できず、そして歴史はその戦争の意味を自由に評価すると結論づけた。コルベット自身は、この仕事に人生を懸けていたわけではなかったが、この分野における彼の唯一の著作である『海軍作戦』について言えば、彼の視点の独自性あるいは完結性を格段に示すものではなかった。ある権威ある評論家の一人は、この著作におけるコルベットの最終巻の公刊に際して、次のように記した。

ジュリアン・コルベット卿の業績は、一義的には歴史研究である。彼の有能な筆にかかれれば非常に価値あるものとなるであろう重要な戦争研究は、〈この本には〉ほとんど完全に欠けている……

この仕事における大きな負担のために、コルベットが戦争前に追究していた独自の研究と思想の方向性を、さらに発展させることは困難であった。1921年、コルベットは、「トラファルガー後のナポレオンと英国海軍」と題する簡潔で準備的な研究を脱稿し、この主題に復帰することを常に望んでいたが、1922年9月21日に急逝した。それは、彼のジェットランド海戦への評価を含む『海軍作戦』第3巻脱稿の数時間後のことであった³¹。

もし、数年でも長くコルベットが生きたのならば、疑いもなく彼はこの海戦の評価、霧に包まれてほとんど姿を現すことのない主要事実、その後長く論争となった原則について、もっと多くのことを付け加えることができたであろう。『海軍作戦』は、海軍史に由来するコルベットの〈海軍に対する〉奉仕の壮大な証拠として残り、その包括的な見解と文章の質により、読み続けられた。しかし、海軍思想と学問の発展への真の寄与は、戦争〈第一次世界大戦〉前に

³¹ 訳注：本書は、コルベットの死後もニューボルト(Henry Newbolt)に引き継がれて刊行が続けられ、最終的には作戦編5巻、通商保護編3巻、商船活躍編3巻の計11巻となった。その内、コルベットが著したのは、作戦編の第1～3巻である。旧日本海軍においても海軍大学校で作戦編が翻訳刊行されて海軍内に配布された。尾崎主税訳『欧洲戦争 英国海軍戦史』全5巻、東京水交社、1927～35年。

完成した初期の著作の中に見いだされるに違いない。

10 コルベットの思想への評価

この分野における後世の著作に対するコルベットの貢献の重要性は、広く認識されている。ブロディ (Bernard Brodie) 博士は、『海洋戦略の諸原則』を「海軍戦略における古典」であると、彼の定評ある『海軍戦略への手引き』で評価している³²。また、その初期の著作である『機械化時代におけるシーパワー』では、マハンの修正者として、コルベットに言及した³³。その一方で、ロビンソン兄弟(the Robinsons)は、海軍戦術を歴史的に総括した彼らの主著で、最も多くコルベットの著作を参照している。戦争研究全体へのコルベットの貢献は、彼の弟子であるリッチモンド(Herbert Richmond)のようなこの分野の後継者の著作の中で最もよく見られる。リッチモンドは、コルベットの死に臨んで、次のように記している。

彼は、戦争史研究——それは、士官にとって、そして政治家にとって中核的な研究——を全く新しい段階へと押し上げた。すべての著作の中でコルベットは、常に戦争の統一性を視野に入れていた。

しかしながら、両大戦間の時期における海軍の最も重要な権威であるカスティクスは、理論的海軍戦略の略史を記した彼の『戦略理論』の中で、コルベットの戦争前における戦略思想の構造全体に異議を唱えた。「又聞きという手段によって、世代から世代へ繰り返して書き継がれて伝えられた伝説」を追究し、これを論破したコルベットの功績を完全に認める一方で、カスティクスは、コルベットの業績が概して本質的に批評的であり、「多くの批判を乗り越えて疑いのない真実であるという確信に至った人々に対しては苦々しく、残酷であった」と感じていた。カスティクスは、コルベットを「不信の人」、「騒がしい饗宴」、そして「戦略による狙撃手(franc-tireur de la strategie)」と呼び、「一方で、この因習打破者は、彼自身の〈理論〉構築者としては、むしろ平凡である」と結

³² 訳注：Bernard Brodie, *A Guide to Naval Strategy*, 3rd ed., Princeton: Princeton University Press, 1944, p. 297.

³³ 訳注：Bernard Brodie, *SeaPower in the Machineage*, Princeton: Princeton University Press, 1941, p. 92.

論づけた³⁴。

カスティクスが論じたように、戦争前における海軍思想形成へのコルベットの影響は、すべて良いものばかりではないということは全くあり得ることである。確かに、コルベットは、1915年に海軍省のために研究した日露戦争で明快に示された新たな技術が、主力艦隊にもたらす危険性に夢中であった。そして、船団使用に反対するコルベットの暫定的な戦争前の判断は、論じられているように、戦争中における通商保護の形態〈船団〉を海軍省が採用することを妨げたのかもしれない。また、フィッシャーの改革のすべてが良好で望ましいものであったわけではなく、コルベットは、戦争前における海軍省の仕事の中で、時折、誤った政策を支持したこともあった。

しかしながら、海洋戦争におけるコルベットの概念の主要な弱点は、カスティクスによっても見過ごされており、この時代におけるほとんどすべての海軍問題に関する執筆者によって共有されたものであった。この執筆者たちは、私掠戦法(*guerre de course*)³⁵について漫然と想定し、あるいは無制限の通商破壊政策は決定的でないとは仮定したマハンに追従していた。1917年と1942年のドイツ潜水艦戦の成功に危険なほど類似しているこの政策〈私掠戦法〉は、新興学派(*jeune école*)の主要な議論を基礎としており、これは英国を打ち負かし、どんな海洋における努力の効果をも否定するためのものであった。それによれば、戦争においてその列強への中核となる通商路自体を管制するのではなく、むしろそれらの管制を否定することだけが必要なものであった。戦争前の英国の戦略思想家の中で、ジェーン(Jane)だけが1906年の著作である『異端(*Heresies*)』の中で、「実際に私掠戦法は決して試みられたことはないということは、常に記憶に留めておかなければならない」と英国に警告したことは、彼のみがこの形態の戦争の可能性を評価したように見える。

しかしながら、政策のこれらの問題を超越して、そして、ほとんどすべてのこの時代の人々によって共有されたこの戦略観の欠点を超越して、コルベットの業績に正当性があり、戦争思想と戦略の発展への価値を有することに議論の余地はないであろう。『七年戦争における英国』は「政略による戦略の偏向」という理論を支持したというカスティクスの非難は³⁶、戦略の政治目的への必然

³⁴ 訳注：カスティクス『戦略理論』第1巻、71-72頁。

³⁵ 訳注：戦時に特定の私人に免許を与え、敵国艦船や商船を捕獲することを許容した船を私掠船と呼ぶ。1856年のパリ宣言で禁止された。

³⁶ 訳注：カスティクス『戦略理論』第1巻、69頁。

的な従属というクラウゼヴィッツ(Karl von Clausewitz)のドクトリンを、海軍戦略の戦争指導全体への従属へと発展させたコルベットの〈の理論〉を故意に誤解していると言わざるを得ない。この理論を発展させたコルベットの目的は、疑いの余地なく偉大であり、〈その理論の発展が〉彼の主題まで達することを企図していた。彼が、『海洋戦略の諸原則』で記したように、

クラウゼヴィッツとジョミニ(Antoine H. Jomini)が到達した最終的な地点に立ってみると、我々は全くこの主題の敷居の上にいるだけである。我々は、彼らが立ち去ったところから始めなければならず、世界規模の帝国の近代的状況に関して両者の思想が何と述べるかを問わねばならない。そこでは、海洋は直接的で死活的な要素となるのである³⁷。

クラウゼヴィッツが『戦争論(*Der Krieg*)』の中で、軍事戦略をより大きな概念である戦争の中に包含させ、その戦争を政治の枠組全体の中へ包含させたのと同様に、〈コルベットの〉この研究は、「海洋戦略」の概念の中に海軍戦略を包含しており、この「海洋戦略」は、シーパワーの特別な影響に適応させることができたのであった。しかし、世界規模の貿易、外交、そして、来るべき戦争を特徴づけた巨大な海外部隊の集合と輸送という特別の状況は、歴史を深く論理的に読み込むことによってコルベットが自分のものとした一つの分野を完成させた。本質的に、彼の仕事は主要な海洋基盤に関連する戦争の究極の目的と副次的な方法を含む洞察の拡張であった。これは、コルベットが戦争指導者の中の理想とした大ピットの方法であり、この大ピットは大陸における戦争に勝つために、英国の海外貿易の富を使ったのであった。その一方で、一隻の74門搭載戦列艦を浮かべるのに十分な水域があれば、世界中どこでも彼の意思を働かせた。そして、これは1940年から1945年までの間、チャーチルの下の英国がドイツの侵攻を食い止め、連合した米英の海洋における努力が、今度は逆に上陸し、侵攻を支え、そのことが第二次世界大戦を勝利に導く手段となった。

もちろん、この種の純粋な理論的業績の重要性は、過大に評価されてしまうこともある。そして、過去の研究のみが、現在の防衛問題を解決するわけではないだろう。しかし、コルベット自身が『海軍史の復興』で記したように、「大戦争は過去を抹殺せず、新たな生命を与えるのである。

³⁷ 訳注：Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. 48.

それ〈戦争〉は、行動する人々にとっては、重要ではなく研究する価値もない過去の
の大惨事のように見えるかもしれない。・・・しかし、そうではない。時間は我々に距
離を与えるので、我々は洪水を永遠に流れる河の中のたんなる一つの大きな淀みのよ
うに見るのである。それがどんなに大きくても、もし、我々が河の水路全体とその流
量を保つために流れるすべての支流の性質を知らなければ、この淀みの現象を理解す
ることはできないのである。

そして、それはこの本質の研究であり、英国の海洋における経験の歴史全体
を範囲としているのであった。コルベットは、この英国の海洋における経験へ
彼の最も深い思想を捧げ、常に理解というこの「新たな生命」のために働いた
のであった。このことは、シーパワーに占める米国の真の国益を指摘した時に、
マハンが働いた理由であり、彼は「国際的な事象の中の最も重要な政治要因で
あり、刺激剤というよりも、しばしば緩和剤」としての海軍力の概念を主張し
た。シーパワーに占める米国の国益というこの概念が真に国家レベルで理解さ
れていれば、孤立主義や「西半球の防衛」という半面だけの真実や、その結果
として1941年から45年までの間、我々が十分な備えをしなかった戦争によっ
てもたらされた苦痛から、我々〈米国人〉は救われたのかもしれない。こ
の現代の紛争の始まるの時代〈1951年当時〉を見据えて、コルベットの業績は、
海洋の防衛というこの問題を効果的に扱い、聞く耳を持つ人々に計り知れない
価値を与えた。フィッシャー卿は、改革と軍備拡張の努力のまさに中心におり、
それによって英国（ブリテン）と英国海軍は、この奮闘の開始時期において、
中核的役割を担って対応した。そのフィッシャーは、コルベットを高く賞賛し、
今日〈1951年〉まさに思い起こされるかもしれない警告を記した。その時、彼
は次のように記したのであった。

ジュリアン・コルベットは、政略と軍事戦略について、我々の言語で最良の書物の
中の一冊を書いた。あらゆる種類の教訓や計り知れないほどの価値が、その書物から
集められるかもしれない。しかしながら、おそらくちょうど今、それを重要視してい
るウィンストン・チャーチルを除いて、誰もそれを読んでさえいない。それにもかか
わらず、あなた方と私は、この戦争の戦略的歴史について空論を交わしている。明ら
かに歴史は、教師や机上の戦略家のために叙述されている。政治家と軍人は、夕暮れ
の薄暗がりの中で、歩みを進めているのである。